

静岡新聞 2024年5月22日付

## 論壇

東京大名誉教授(国際経済学)

伊藤 元重

海外から来る観光客から見れば、日本では全てが安く見えるようだ。ホテル代や食費などが安いので、インバウンドの観光客が押し寄せてきている。日本の不動産が安いのでアジア系の人々が不動産を買い漁っている。東京都心で何億円もするマンションをアジア系の富裕層や投資家が購入しているという話を聞くことが多い。

日本に多くの観光客が来て、日本に向けた投資が拡大しているのはよいことのように見えるが、日本が買い叩かれていくようにも思えるので、複雑な気分にもなる。なぜ、日本はかくも安くなくなってしまったのだろうか。

今から30年前の1995年、私は「日本の物価はなぜ高いのか」という本を出版した。当時、日本の物価は諸外国に比べて非常に高く、内外

# まずはデフレからの脱却を

価格差が大きな社会問題になっていた。今とは真逆であるが、諸外国に比べて高すぎる日本の物価の姿について議論が高まっていたのだ。

この30年を振り返ると、円の実力が大きく低下していることが分かる。30年前の円ドルレートは80円であったのが、現在は150円台であるので、円とドルの比較でも半分近くにも円の価値が下がっていることが分かる。

ただ、それだけではない。手元にあるのが20年くらいの数値であるので30年前まで遡れなかったが、コロナ前の20年、日本では物価や賃金は平均してほとんど変化しなかったのに対し、米国では毎年2%近くで上昇していた。20年で、米国の物価や賃金は、日本に比べて48%(2%の20年分)高くなっていることになる。要するに、為替レートの変化以外に、日本のデフレで物価や賃金が安くなっているのだ。

このような為替レートとデフレなど、様々な要因を重ね合わせて、全体として円の実力がどのように変遷したのかわかる上でよく使われる指標が実質実効為替レートと呼ばれるものである。為替レートの変化と物価の動きから計算される指標である。これによ

ると、円の実質実効為替レートは過去のピークで、1995年6月の191・26、そして直近の2024年1月で72・87である。この数字は指数値であり、20年を基準の100として計算してある。数値が大きいほど円の実力も強くなっていることを示している。

この指標によると、この30年間に円の実力は30年間で38%にまで縮小したことになる。道理で世界中が日本買いに走るわけだ。日本が安く買われるのは悔しい気はするが、当面は円安の利点を最大限に活かすようにしなくてはいけない。インバウンドの観光客の増加を梃子にした地域振興、そして海外からの投資の拡大などが鍵となる。

物価とともに日本の賃金が安すぎることも問題なので、賃金を諸外国並みに引き上げていく努力をすることも重要だ。デフレが安すぎる日本の要因の一つであるとなれば、デフレ脱却に有効な賃上げを進めていくことの意義は大きい。上で説明したように安くなくなってしまった円の地位は30年以上かけて辿り着いた結果である。まずはこの30年間の特徴であったデフレからの脱却を実現することから始める必要がある。